

わざはひをわすれてわれを出むかふる

民の心をうれしと思ふ

(昭和天皇 御製)

去る八月十五日、閣僚の靖国神社参拝、韓国野党議員の抗議など、朝からメディアはこぞつて靖国神社に関する報道を行っていた。この日は六十八回目のいわゆる「終戦記念日」である。六十八年前の八月十五日正午、終戦の詔勅がラジオによって放送され、国民は日本の敗戦を知ることとなった。

国際的に「終戦」となるのは、東京湾に停泊するミズーリ号の甲板で降伏文書にサインした九月二日のことである。しかし、日本では八月十五日を「終戦記念日」としている。なぜだろうか。ラジオを通し、初めて耳にする天皇陛下の声。それも内容は日本の降伏を伝えるものであった。玉音放送を聞き、地面に頭をこすり付け泣いた人もいたというから、その衝撃は戦後生まれの私たちには想像することのできなない大きなものだったのだろう。これは私の推測だが、この衝撃の大きさが八月十五日を日本人にとって特別なものにしたのではないだろうか。

この日の夕方、私も靖国神社を参拝した。夕方にも関わらず、多くの方が参拝されていた。仕事帰りと思われる男性や若いカップル、子供連れの家族も目立った。普段から多くの参拝者がある靖国神社だが、やはりこの日は特別だった。二の鳥居の前から拝殿の前までは人数の規制がなされ、二十分くらい並び、お参りの順番を待った。その時に後ろの家族の会話が耳に入ってきた。お母さんと思われる女性が、「私はあなたが生まれなかつたら一生(靖国神社に)来なかつたかもしれない。あなたができたことである。考えたんだ。」とお子さんに話しかけていた。お子さんは「ふーん」と返すだけだったが、その後もお母さんは戦争のこと、靖国のこと、日本のことなど様々なことを話しかけていた。私にとって「あなたができたことである」と考えた結果、この日に靖国神社に家族でお参りに行くことと思いついたということが大変印象的だった。恐らく子どもができたことで「家族を守ること」や「日本を守る」ということについていろいろ考えたのだろう。その結果、戦争という過酷な状況の中、命をかけて家族を守り、国を守った先人に畏敬の念を抱くようになったのかもしれない。もしかしたら、英霊としてお祀りされているこのご家族のご先祖様へのお参りだったのかもしれない。

どちらにしても、私はこの家族の会話から靖国神社のあるべき姿を見たような気がした。靖国神社は自らの政治的な考えをぶつける場ではなく、政治的なパフォーマンスをする場ではない。命をかけて家族を、国を守って下さったことを英霊に感謝をし、そして家族を、国を守ることの大切さを次の世代に繋いでいく場、それが靖国神社なのではないか。だからこそ、どのような立場にせよ靖国神社を政治的に利用することなどあってはならないのである。

この日、日本武道館では天皇皇后両陛下ご臨席の下、全国戦没者追悼式が開催された。その式辞で安倍首相は「歴

史に対して謙虚に向き合い、学ぶべき教訓を深く胸に刻みつつ、希望に満ちた国の未来を切り拓いてまいります」と述べた。

冒頭で触れた降伏文書の調印式、日本政府の代表は重光葵(しげみつまもる)という外交官だった。重光は不名誉な降伏文書への署名に際し、心境を次のように詠んでいる。願くは 御國の末の 栄え行き

我が名さけすむ 人の多きを

「将来日本が栄え、降伏文書に署名した自分のことを軽蔑する人が出てくることを願っている」という歌である。未だに閣僚が靖国神社を参拝することで大騒ぎする国を、重光はどのように思っているのだろう。安倍首相の式辞にあるように、日本が子ども達にとって希望のもてる国となることを、靖国神社に祀られている英霊の方々も願っているしやることだろう。

行事予定

- ◎十月六日(日) 正午より 月例祭(教会創立記念祭)
- ◎十一月三日(日) 正午より 光神祭
- ◎十二月一日(日) 正午より 月例祭

七・八月の神事

七月十九〜二十一日の三日間で平成二十五年度の木曾御嶽山登拝に行つて参りました。本年は三日ともお天気に恵まれ、脚に自信のある方は、剣ヶ峰までお参りすることもできました。また、来年も多くの皆様と登拝できることを願っております。

八月三日には昨年に引き続き、「易と五大尊」という演題で講習会を行いました。とても実りある講習会となりました。

奉納御礼

この度、窪寺良輔様より、「霊神場の改修費用」といたしまして、特別にご奉納いただきました。皆様が参拝しやすいよう、階段の整備などをさせていただきました。この場を借りて皆様にご報告するとともに、改めて厚く御礼申し上げます。

